



東京日々新聞

千三十六号



△土地の名
 所の焼捨山と思ひ
 桐原おき去ま幾らの山の
 炭干やら有明山の鏡のま
 集ち走て耻と更科や田毎の
 月の影暗くお戸
 隠山ちさりら松の
 木蔭は休息て
 「コレお大主引と
 て善光寺もや近
 付と嶮岨の名喚草野やあつらん
 大い苦勞とせやと。云よお大の
 上り「抑や爺様と逢そお川の
 手裏りむさ、恥ぢさ些とんを
 筑戸川と膝で脊中をつくま川
 嬉ハ中ちやるの否と
 戲せゆる其折しも
 持病の積ま非おして突俄
 轉倒と。卒中風あて臥腦む
 老氣の至りの道行ハ。河原寄座の
 淨瑠璃まのさり似と非珍説あり

轉々堂主人

戲記



一萬齋
 廿七歳

甲形
 貝足屋
 ホリ栄

